

ウクライナ問題に関するフランスマスコミの記事

(2022年4月18日)

広岡 裕児*

2022年4月6日付、「ウクライナ侵攻の背景について」に関連して、ぜひご紹介したいフランスのマスコミに出たインタビュー及び論説を抄訳する。

● ヴァジル・シェレパニン（視覚文化研究センター所長）インタビュー¹

キエフの哲学者教育者、オレンジ革命とマイダン革命の活動家

—（問）なぜウクライナはロシアにとってそれほど重要なのでしょうか。

「ロシアの体制の性格を理解しなければなりません。その問題点は政権交代のメカニズムがないことです。それ故にクレムリンは、あらゆる社会的運動や革命を恐れるのです。ウクライナは成功した民主革命を表現しています。過去20年間で、2つの革命がありました。2004年のオレンジ革命と2014年のマイダン革命です。後者はアラブの春のように機能しました。ウクライナ人は血に汚れた独裁体制を排除するのに成功しました。これが基本的に、ロシアによるウクライナの領土の占領とクリミアの併合が8年前に行われた理由です。

この革命はクレムリンの最悪の悪夢です。なぜならロシアでこのようなことが起きたら、権力者はすべてを失ってしまうかもしれないからです。彼らは、そのような革命がロシアで起こらないようにするために何でもする用意があります。実際、ウクライナはモスクワの体制の民主的な代替案を表しているため、彼らはウクライナを国家として完全に抹殺しようと決めました。それは基本的に彼らの生存戦略であり、彼らは永遠に支配しつづけようとしています。」

—（問）ウクライナの歴史は中世から今日までさまざまな民族が侵略し定住したので複雑です。しかし、ウクライナはスラブ文化のゆりかごであるようです。プーチンは文化的歴史的理由でウクライナを攻撃したのではないのでしょうか。

「ロシア人にとって、キエフは、ルーツです。スラブ文化といわれるものの起源です。それ故に彼らはつねに歴史を書き換え、ウクライナはいつもロシアの一部だったとしているの

* 公益財団法人都市化研究公室特別研究員、日本 EU 学会会員

¹ Les Echos Week End （電子版 2022 年 3 月 8 日、紙面 3 月 11 日）

です。そして、19世紀には、たしかに、ウクライナの一部はロシア帝国に併合されました。しかし、ここで、歴史は口実に過ぎません。ロシア大統領は、自分および協力者が犯罪者とされることを知っているので権力を失うことを恐れているのです。そしていまや彼らは戦争犯罪者です、法廷によって裁かれるでしょう。こういう文脈においてこれらのあらゆる歴史的な主張は誤った手懸りです。なぜなら、その裏にかくれているのはどうやって政権が生き残れるかという問題だからです。」

— (問) なぜウクライナ国民は2010年に親ロシア派大統領ヤヌコビッチを選び、2014年には親欧州派を選んだのでしょうか？この間にウクライナ社会で何かが変わったのでしょうか？

「戦争が始まる前、2014年にクリミアが併合されドンバス地方でウクライナの領土が占領される前、ウクライナ社会は決して反ロシアの感情を抱いていませんでした。よもやロシアと戦争するなどということは思ってもいませんでした！ これらの2つの国はいつもお互いに非常によい関係性をもっており、ウクライナはバイリンガルの国であり、すべての人々がウクライナ語とロシア語を話します。ソビエト時代以来、多くのウクライナ人はロシアに親戚がいて、その逆もあり、私たちにはまったく何の問題もありませんでした。いわゆる親ロシア派大統領が選挙に勝利したからといって特別なことは何もありませんでしたが、2014年にヤヌコビッチが欧州連合との経済協定に署名することを拒否したときに抗議運動が始まりました。人々は街路を占領しました、それがマイダン革命でした。デモ隊はひどく抑圧され、多くの人々がヤヌコビッチ政権によって殺害されました。誰一人として彼を許せないことは明らかでした。それ故に、アサド政権を取り除くことができなかつたシリアとは反対に最終的にマイダン革命が勝利したのです。これが、ロシアがウクライナの領土を占領し始めた理由です。なぜなら、単純に、マイダンのようなことがロシアで起こることを望まなかつたからです。それは純粋に政治的で反革命的な反応でした。ウクライナ人として私たちはすべきことをして、3人の独裁的指導者を排除し、マイダンの後に民主的な変化をもたらしました。選挙を行い、ゼレンスキーの前任者であるポロシェンコが大統領に選出されました。」

— (問) では、マイダン革命はロシアとウクライナのメンタリティの大きな違いを明るみに出したのでしょうか？

「ロシアでは、もし沈黙を守るならばあなたは戦争犯罪の共犯者です。これが問題です。過去20年間、ロシア社会はこの体制を受け入れてきました。(……)

ウクライナでは、蜂起は全体的、文化的、社会的、さらには経済的であり、欧州連合に加盟したいという国民の願望が示されていきました。一方、ロシアでは今日でも数千人が戦争に抗議しているだけで、現時点では反戦運動はなく、人々は沈黙を守っています。公式にウクライナでの戦争に反対した機関はひとつもありません、文化の分野においてさえです。数人の個人やいくつかの集団はありますが、機関はありません。それは一つの症状を表しています。これは、あらゆる形態の独裁を終わらせ、ロシアでは成しえなかつた、社会的変容のために民主的な行動をとったウクライナ社会で起きたこととは正反対です。」

—（問）2019年ポロシェンコは選挙で負け、ゼレンスキーが勝ちました。このウクライナ社会の選挙での転回は何を物語っているのでしょうか？

「ウクライナでは、俳優のゼレンスキーが投票の73%を獲得したのでよく『選挙のマイダン』と呼ばれます。このような好結果は世界中の独裁的指導者の夢でしょう！ 彼らは通常それを得るために不正をします。マイダンの後、ウクライナ社会は真の社会的経済的变化、とくに風土病ともいべき経済的汚職などを除去することを望みました。ポロシェンコはこの変化の代表となることはできませんでした、彼は古いエリートの一部でした。

ゼレンスキーには、完全に政治の外にいるという利点がありました。彼は新しい波、別の世代、過去ではなく未来に向けられた新しいメンタリティに属し、彼を有名にしたまさにそのシリーズで、腐敗と戦いパラダイムを変更するために政治の世界に入る市民社会の人々の姿を具現化しました。ゼレンスキーは、マイダン革命後の自然な段階でした。そして、本質的には1990年代初頭以来ウクライナを支配していた古い腐敗した政治家や寡頭制のサークルを排除するための選挙による革命でした」

—（問）ゼレンスキーが当選した時、西洋のマスコミでは世界中の国々を侵していたポピュリストの波のおかげで当選したアウトサイダーだと描かれました。どうして、それほどまでに誤ってしまったのでしょうか？

「まず第一に、ゼレンスキーはマクロン大統領が所属する世代の政治家だと思います。これはマクロンのスタイルでもありました。選挙に勝つために、彼は政治の新しい顔として提示し、自分自身の運動をつくり、古い政治に挑戦しました。ポピュリズムということが、その言葉の起源が示唆しているように、人々のために政治を行う方法であるという意味であるならば、そう理解するならば、このプロセスにあてはまります。

ヤヌコビッチ以来、エリートと庶民の間にギャップがありました。ヤヌコビッチのサークルは「家族」、スペインとイタリアでは「カスタ」、と呼ばれ、文字通り国の財務経済問題を担当している人々の狭いサークルでした。ゼレンスキーは俳優コメディアンでしたが、大統領になるとすぐに番組から姿を消しました。彼の党「国民の僕」はゼレンスキーが選ばれたときのように議会で過半数を獲得しました。これもまたウクライナの歴史においても前例のないものでした。彼の党の選出議員のほとんどは市民社会から来ており、それは明らかな世代交代であり、もはや以前のようなことはありえないということは明らかでした。

戦争とは真実の瞬間です。この状況において、人々は反応しその真の姿をあらわしました。この戦争以来、ゼレンスキーが真のガイド、真の指導者という姿をみせているのは一種の奇跡です。世界第2の軍隊と私たちの時代の最悪のファシストリーダーに挑戦して対抗するのは信じられないことです！ しかし、繰り返しになりますが、これはマイダンの結果の1つだと思います。ロシアの最大の過ちは、ひとつのマイダンになった4,400万人のウクライナ人と戦争をしているということを理解していないことです。」

●ミシェル・エルチャニノフ²

フランスの哲学者「プーチンの頭の中」 Dans la tête de Vladimir Poutine、2015著者

2000年に大統領に就任して、プーチンは政治的自由主義のカードを使った。(……) 2000年から2004年までの彼の最初の任期中、プーチンは、プラグマチックで、比較的西側に開かれた近代化を進める者であろうとしていた。(……) 彼は、社会的および経済的観点から非常に困難だった1990年代のあとで、自国を西洋の水準に引き上げたかった。彼は喜んでフランスの取れた政治的自由主義の姿をみせた。(……)

最初の数年間のプーチンのオクシデンタリズム(西洋主義)は、一時的で表面的なものであった。それは長くは続かなかった。プーチンは今日そもはやれを非難することを恐れていない。2019年6月、彼は「自由主義的な考え」は「時代遅れ」であると主張した。自由主義者は、米国のトランプイズム、ヨーロッパのポピュリズムなど「大衆の反乱」に直面しているため、もはや共産主義の崩壊以来行ってきたように、「誰に対しても何であっても命ずることができない」。

ロシア・コーカサスの小都市ベスランではもっと悪かった。チェチェンの反政府勢力が、2004年9月1日、新学年の学校の子供たちと教職員を人質にした。解放の攻撃は大混乱のうちに行われた。人々は銃火に挟まれ、186人の子供を含む344人が死亡した。そのトラウマは全国的に深く、様々な方面から批判がでた。

ウラジミール・プーチンはこの悲劇から3つの信念を引き出した。第一に、彼の顧問たちが「指導民主主義」あるいは「権力の垂直性の強化」と呼ぶものを強調することによって、地方の責任者の不始末と戦う必要があるということ。ロシアのような巨大で多民族で多宗教の国は、分離主義者の誘惑があり、強い手で導かれなければならない。第二に、70年にわたる共産主義とソビエト後の混乱から抜け出したロシアでは西側諸国は歓迎されないということである。2003年にジョージアで起こった「バラ革命」や翌年のウクライナで起こった「オレンジ革命」は、親欧米の指導者たちに権力を与えたが、ロシアを弱体化させたいアメリカの秘密機関が働きかけたことだということを彼に確信させた。最後に、イスラム教の宗教的狂信に対する彼の反応は、道徳を宗教に依拠させたいということであった。彼はまさに再生しつつある正教会に近づき、キリスト教の価値観が倫理の基盤であると宣言した。プーチンは保守的な転回をした。

ウラジミール・プーチンは、自分に対する西側の敵意を確信している。彼は、2000年代に旧ソビエト圏諸国がNATOや欧州連合に加盟したことを非常に悪く見ている。彼は西側が提案するものとは異なるロシアの発展モデルを自慢し始めた。伝統的に、19世紀以来、西洋主義者—ロシアの独裁政治を民主主義と法の支配に進歩させようとする者—とスラヴ主義者—農民コミュニティと正教会の倫理に基づく自律文明の支持者—とが対立する争いの中で、プーチンは後者に傾いた。より正確には、彼はロシアがヨーロッパに溶け込むには大きすぎ、特異すぎ、誇り高すぎると主張する19世紀の終わりの著者に依存し始めた。とくに「ロシアの

² Les Echos 2022年3月9日

ニーチェ」、クリミア戦争中の戦争医師で大いなる誘惑者で正教会の僧侶になったコンスタンティン・レオンチェフを引用する。(……)

ウラジミール・プーチンは、2013年にレオンチェフから別のアイデアを借りる。「ロシアは、哲学者コンスタンタン・レオンチェフが胸を打つ言い方のように、ロシア人、ロシア語、ロシア文化、正教会、その他のロシアの伝統的な宗教に基づく国家文明（訳注：国家イコール文明ということ）として、『繁栄する複雑さ』として発展してきた」。このロシア世界は非常に多様な文化を宿しているため複雑であるが、これらの違いが調和し、運命の統一を保証する国家指導者に集約しているので繁栄する。

しかし、ウラジミール・プーチンが2005年から他の誰よりも参照する哲学者がいる。ボルシェビキ革命後ドイツとスイスに移住した思想家、イワン・イリインである。(……)

プーチン大統領は主要な演説にイリインを引用し始めた。今日でも、2021年10月のヴァルダイ・クラブのロシア専門家会議のように、彼はイリインが好みの作家でありつねにその本を手元に置いていると認めている。この本は「私たちの使命」というものである。これは1954年に出版された記事集で、イリインは憎むべき共産主義の崩壊後にロシアがどうなるかを想像している。とりわけ、彼によれば、それは代表者が交代することを伴う西側の「形式的な民主主義」の道をたどってはならない。この道はロシアを弱体化させ、「ロシアを解体して西側の支配下に置き、元に戻し、最終的には消滅させる」ことを目標にしている西側に引き渡してしまう、とイリインは書く。

反対に、選挙算術に基づかない「民主的独裁」を実施しなければならない。その指導者は、ロシア人の団結を確保し、イリインによれば、「外国勢力に支持された分離主義者の試み」を防がなければならない。「指導者は経歴を積むのではなく経歴を役に立てる、その他大勢になるのではなく戦う、空虚な言葉を発する代わりに敵を攻撃する、外国に売る代わりに指揮する」まさにプーチンのプログラムが書かれている。(……)

2012年のウラジミール・プーチンの3回目の大統領選挙は、簡単ではなかった。2011年末の総選挙は大規模な不正によって汚れ、市民の抗議運動を引き起こした。ウラジミール・プーチンは依然として人気がある。一彼は権力を握って以来メディアを支配し、タフな男という彼のイメージづくりをしている一彼は人々の間での疑いを知覚している。そこで、その後、彼は保守的な転回を完了し、ロシアの新しいドクトリンを設定した。

2013年、集会で、プーチンは非常に退廃的であると考えた西側を正面から攻撃した。「多くの欧州大西洋諸国は[……] 国家的、文化的、宗教的、あるいは性的にでさえ、伝統的な倫理的原則とアイデンティティを拒否している。多くの子供を持つ家族と同性のパートナーシップを、神への信仰と悪魔への信仰を同じレベルに置く政策を追求している。[……]多くのヨーロッパ諸国の人々は、自分たちの宗教的所属について話すことを恥じて恐れている」。これは「人口学的道徳的危機」につながるほかはない。(……)

2014年、ロシアはいくつかの旧ソビエト共和国(カザフスタン、ベラルーシ、アルメニア、キルギスタン)とユーラシア経済連合を設立した。欧州連合と競争し、統合に向けて前進することを目的とした広大な自由貿易地域である。ウクライナはこの新しい組織の中心的な部分となるはずであったが、2014年の初めに勝利を収めたマイダンの民主的親ヨーロッパ的革

命は別の結末を迎えた。ロシア大統領の大いなる怒りを買った。

ユーラシア主義は、1920年代に亡命したロシアの思想家、歴史家、言語学者、地理学者の間で生まれた古い考えである。彼らによると、ロシアは「ローマ・ゲルマン」ヨーロッパには属しておらず、その広大なアジアの領土で、西洋とは根本的に異なる自然と文明の全体を形成している。スラブ人とトルコ人、正教会のキリスト教と伝統的イスラム教の人々の混合物であるこの「陸の帝国」は、衰退しつつあるアングロサクソンの「海の帝国」およびヨーロッパに対峙する運命を持っている。この経済同盟はあまり発展していないが、アジアに目を向け、世界をロシアと中国の軸に向けようとするのは、2000年以來のウラジミール・プーチンの戦略目標の一部であった。ウクライナとの戦争の勃発とともに、このプロジェクトはクレムリンの必需品になる。長期的には、台頭する中国の、広い空間と資源に富んだ「弟」、家来になるリスクをもちつつ。

ウラジミール・プーチンは、長年にわたって辛抱強く採り入れたこれらすべての信念で武装して2022年2月に大プロジェクトの実現に移った。ウクライナへの大規模な侵略は、彼が何年にもわたって言ってきたことと完全に連続している。第二次世界大戦の記憶は彼にとって強迫観念になっている。ベラルーシとウクライナを支配することは、ソビエト時代への郷愁の確かな兆候である。

西側との対立は、ロシア独特の道の肯定と政治的自由主義との価値観の戦いを実現する。習近平の中国との同盟関係の探求は、ユーラシアの転換を強化する。

(以上)